

ニホンジカの生態調査に基づいた効率的捕獲技術

和歌山県果樹試験場 環境部 法眼利幸

1. はじめに

ニホンジカ（以下シカ）による農林業被害対策として、捕獲により頭数を大幅に削減し、その状態を維持していくことが求められています。将来的に銃猟者の減少は避けられない状況にあります。そのため、銃に依存しないシカの安全で効率的な捕獲技術の開発が急務となっています。

2. 試験内容と結果

(1) 捕獲場所の選定

捕獲場所の選定には、夜間に車上から強力なライトで照らし、反射するシカの目を数える「ライトセンサス」が有効だと考えられました。有田地域では、シカは夜間に大規模な未利用造成地と耕作放棄地に集まっていました（図1）。

(2) 誘引エサ選定

飼料のヘイキューブ（牧草を押し固めたもの）はシカの嗜好性が高く、誘引エサに適していると考えられました（データ省略）。また、有田地域ではイノシシと同様に米ぬかの嗜好性が低いという地域性がみられました。

(3) 捕獲機材の選定

出没するシカの集団は、ほとんどが3頭以下と小規模でした（図2）。また、和歌山県のシカの生息地に広い平坦地が少ないことから、捕獲には4×4m程度の小型の囲いワナが適していると考えられました。今回用いた小型の囲いワナは簡易な組み立て式で、軽トラック1台のみで運搬できます。

(4) 捕獲

囲いワナ内にシカが複数頭入り誘引エサを食べ続けるまで、十分に餌付けできていることをセンサーカメラ等で確認したのち捕獲を開始すると、捕獲されたシカを囲いワナの外から見ているシカをも1~3頭ずつくり返し捕獲することができました（図3）。今回、ワナの作動には県内企業と共同開発している電子トリガーを用いました。

3. まとめ

シカの生態は地域性がみられるため、捕獲する前にライトセンサスやエサ試験等の調査を、あらかじめ実施することで効率的に捕獲できることが分かりました。有田地域では、ライトセンサスにより多くのシカが見られる未利用造成地に3頭以下の集団が複数出没するため、4×4mの囲いワナを設置し、ヘイキューブによる十分な餌付けを行うことで、1~3頭ずつくり返して捕獲できました。

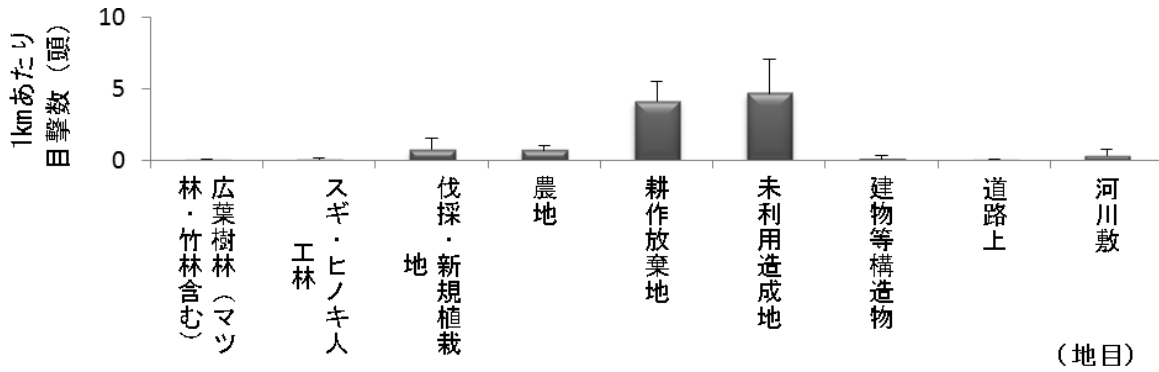


図1 有田地域のライトセンサスにおける地目別のニホンジカ目撃数

注) エラーバーは標準偏差を示す

調査方法：ライトセンサスはH24 9月～H25 9月に27回(隔月3回/月)実施した。決まったルート37.4km(広川町～有田川町～湯浅町)を、日没1時間後から時速10km程度で走行する自動車から高輝度ライトを用いて目視で探査した。地目は100mおきに目視で占める割合が高いものに分類した。

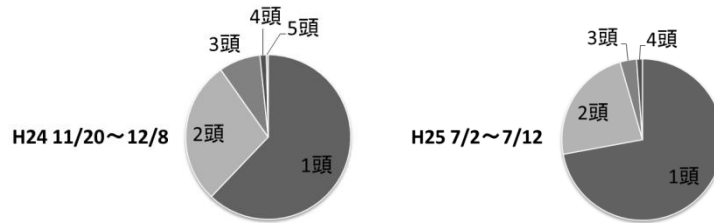


図2 ニホンジカのエサ試験において同時に撮影された頭数の割合

注) 使用エサ：ヘイキューブ、米ヌカ、圧片トウモロコシ

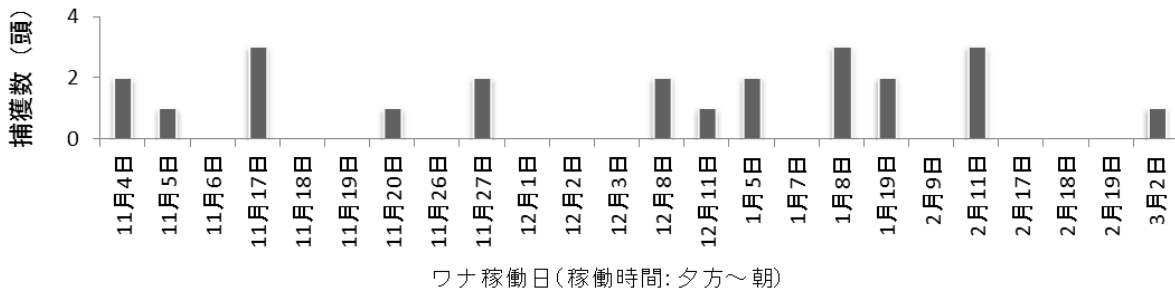


図3 有田調査地におけるニホンジカ捕獲状況

注) 捕獲期間：H26 11/4～H27 3/2 (24晩稼働、23頭捕獲)

試験方法：ニホンジカ目撃数の多かった未利用造成地に、囲いワナ(竹森鐵工社製サークルD 4×4m)をH26 10/20に搬入し10/24に組立てた。囲いワナ内のヘイキューブに餌付いたのを確認したのち、イノシシ用電子トリガー(開発中)を10/29に設置し11/4から稼働させた。餌付けはH26 10/20～H27 1/20の平日に可能な限り実施したところ、10/24に囲いワナ内部にシカが複数頭入りエサを食べた。(H24～26に時々試験でエサを使用したため餌付け期間が短縮された可能性がある)